

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

①人材養成目的に沿った科目構成の整理

●北海道医療大学心理科学研究科臨床心理学専攻

「科学者実践家モデルに基づく臨床心理学教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

科学者実践家モデルに基づく教育カリキュラムの整備が行われた。具体的には、①臨床心理学の基礎となる心理学基礎科目、精神医学等の医学基礎科目、臨床心理学的介入の基礎となる各種理論の学習、研究法をコースワークとして学修する、②臨床心理学的介入の技法、および臨床心理学的アセスメントの実際をコア科目として実習を通して実習する、というカリキュラムの整備が行われた。また、医療系その他職種の養成課程で導入されている OSCE (Objective Structured Clinical Examination: 臨床的臨床能力試験) を修士課程 1 年次後期の初めに実施し、臨床心理学的援助に必要な技能の習熟が行われているかどうかを客観的に評価するシステムを我が国の大学院臨床心理学教育に初めて導入した。OSCE によって技能習得が行われていると判断された大学院生は、その後、大学附属の相談施設においてカウンセリングの実習に参加し、より実践的な技術を獲得することができるよう実習教育のシステムを整備した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

カリキュラムの整備にあたっては、全国の同様の大学院を対象とした調査、心理士を雇用する職場がどのような心理士を養成してほしいと考えているかの調査、そして、臨床心理学的サービスを受ける利用者の要望調査を実施し、理念的に考えられるカリキュラムと社会的ニーズとの整合性を保ち、社会的要請に応えることのできる人材育成のためのカリキュラムを構成するよう工夫した。また、OSCE のマニュアルや評価用具の開発にあたっては、関連する医療職で既に実施されている OSCE、海外で実施されている OSCE を参考にするとともに、臨床心理学援助を行うことのできる人材に必要とされる基本的技能等を課題として取り入れることができるよう十分な議論を行った。また、模擬患者さんとの連携等に配慮を行った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

カリキュラムの整備を行う作業の中で、修士課程での教育目標が改めて再確認された。また、学年、学期を追っての履修のプロセスが明確となった。実習教育に関しては、OSCE に向けた実習前教育での教育目標が明確化されるとともに、実習内容の充実が図られた。さらに、OSCE で各種技能が習得されている大学院生が実際の来談者を対象としたカウンセリング実習を実施するにあたり、利用者に等質のサー

ビスが提供出来るようになったとともに、実習で取り上げられる課題がより明確になった。さらに、修士課程を修了して大学院生が臨床現場に就職する際、即戦力として常勤雇用される修了生が増加した。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

④その他

●北海道医療大学心理科学研究科臨床心理学専攻

「科学者実践家モデルに基づく臨床心理学教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

北海道という地域特性を考え、遠隔地支援を行うことのできる専門家の養成を目的として、二つの試みが行われた。一つは、ICTを活用した遠隔地カウンセリングであり、一つは地域資源と連携した支援活動である。ICTを活用した援助活動は、インターネットのテレビ会議システムを用いて、北海道内の遠隔地にある高等学校生徒に対する教育相談活動を行うシステムを構築し、臨床実習の中に、インターネットを通してカウンセリングを行うという活動を導入した。また、地域資源と連携した支援活動は、地方公共団体と連携し、当該の市町村における住民サービス活動の中に大学院生の援助活動を組み入れ、大学院生がより地域と連携する中で臨床心理学的援助の実際を学修することができるようシステムを整備した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

ICTを活用した援助活動では、事前に当該の対象施設機関等と十分な打合せを行うとともに、インターネット環境における個人情報保護等の倫理的配慮に特に注意を払った。一方、地域資源との連携においては、当該の地方公共団体との十分な打合せ、連携に特に配慮を行った。また、大学院生を地域に派遣する際の経費負担（旅費、保険も含め）を大学において負担するよう配慮した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

地域特性を考慮して支援することのできる援助技法の習得を実習教育の目的の一つとして位置づけることができるようになった。また、大学院生が実際に地域援助活動に参加することによって、単に臨床技能の習得が図られただけではなく、大学院生の一般的な社会的スキルの向上にも教育効果が認められる。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

F. その他

④その他

《人社系》

●北海道医療大学心理科学研究科臨床心理学専攻

「科学者実践家モデルに基づく臨床心理学教育」の事例

〈大学院生の恒常的研究活動の促進と情報発信〉

(具体的に何を実施したのか)

臨床心理学に関連する高度専門家の一つの側面である「臨床家の目を持つ研究者」の養成という点から、修士課程では、心理学基礎科目の学修に始まり、研究指導と修士論文の作成に至るまでの経過の中で、研究という視点から臨床の現場で起きていることを見ることができるよう指導の着眼点を定めた。また、修士課程、博士後期課程ともに、日頃から行っている研究の成果を社会に向けて積極的に情報発信することを推奨するよう指導を行った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

修士論文指導を主査を含む3名の教員によって行うとともに、大学院生による共同研究を奨励し、研究に参画する機会が増えるよう配慮した。また、論文執筆の技術について個別に大学院生を指導する機会を準備した。さらに、成果を公開するにあたり、学会参加に伴う経済的負担を軽減するために、発表者に対する学内外の経費補助制度を積極的に活用するよう奨励した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

修士論文をはじめとして、大学院生の研究に取り組む姿勢がより真摯・熱心になるとともに、その結果として、大学院生が行う学会発表の件数(国内学会、および国際学会)が増加した。海外の学会での発表件数も増加した。同時に、学会誌に掲載された学術論文数が増加した。また、博士後期課程の大学院生にあっては、日本学術振興会特別研究員として採用される大学院生数が増加するとともに、博士後期課程修了時での学位取得率がほぼ100%となった。さらに、博士後期課程修了者は大学等の研究職として就職している。